

第 1 章 平成 30 年度 生乳検査成績

1. 合乳検査成績

(1) 合乳成分検査成績

道内で生産し取引される生乳について成分検査を実施しました。

北海道指定生乳生産者団体加入の 109 受入箇所（以下「インサイダー」という。）の全合乳と、一部これに属さない農協および生産者 9 団体（以下「アウトサイダー」という。）に係る合乳について検査を実施しました。

ア. 方 法

(7) 試 料

生乳取引の行われる工場において、検査日に集乳施設（以下「CS」という。）、およびバルククーラー（以下「BC」という。）から搬入される合乳を取引単位（受入箇所）の試料としました。

(4) 検査回数

旬間 1 回以上

(ウ) 試料採取箇所および方法

CS および BC を経由した試料は、タンクローリーから採取しました。

なお、試料の採取および保管に当たっては、当該乳業工場に 1 名ずつ業務を委託した生乳検査事業協力管理者（154 名）の協力を得ました。

(イ) 検査項目および方法

- a. 脂肪率・・・・・・・・・・光学式乳成分測定機により検査しました。
 - b. タンパク質率・・・・・・・・・・
 - c. 乳糖・灰分率・・・・・・・・・・
 - d. 無脂固形分率・・・・・・・・・・
 - e. 全固形分率・・・・・・・・・・
- // (乳糖率+1.00 として算出)
- // (タンパク質率+乳糖・灰分率として算出)
- // (脂肪率+無脂固形分率として算出)

イ. 結 果

(7) 合乳検査乳量

表 1 に地区別合乳検査乳量を示しました。

総検査試料数および検体数はそれぞれ 83,691 試料、167,382 検体（1 試料当たり 2 検体）で、検査乳量は 3,841,223,548.5 kg、うちインサイダーの検査乳量は 3,832,387,663.7 kg、アウトサイダーは 8,835,884.8 kg でした。

なお、合乳検査乳量は前年度と比較して 100.9% でした。地区別では空知地区の 95.1% から十勝地区の 103.2% の範囲でした。

(イ) 合乳成分検査成績

表 2 に地区別合乳成分検査成績を示しました。

全道の平成 30 年度の平均脂肪率は 3.964%であり、前年度(3.958%)と比べ 0.006 ポイント増加しました。平均無脂固形分率は 8.769%で、前年度(8.786%)と比べ 0.017 ポイント減少しました。平均タンパク質率は 3.311%で、前年度(3.327%)より 0.016 ポイント減少しました。平均乳糖・灰分率は 5.458%で、前年度(5.459%)に対して 0.001 ポイント減少しました。

(ウ) 合乳成分検査成績(分布)

表 3 に合乳における成分ごとの度数分布を示しました。

脂肪率の最多分布区分は前年度と同一の 3.900~3.999%であり、割合は 25.7%と前年度の 24.4%に比べ 1.3 ポイント増加しましたが、4.000~4.199%の範囲に 35.9%と前年度(37.0%)に比べ 1.1 ポイント減少し、分布は低い区分にシフトしました。

無脂固形分率の最多分布区分は前年度と同様に、8.700~8.799%区分の割合は 39.9%と前年度の 36.9%に比べ 3.0 ポイント増加しました。全体的には 8.700~8.999%の範囲に 76.0%と前年度(81.9%)に比べ 5.9 ポイント減少し、分布は低い区分にシフトしました。

タンパク質率での最多分布区分は 3.300~3.399%区分の 40.7%と前年度の 44.1%に比べ 3.4 ポイント減少しました。

乳糖・灰分率の最多分布区分は 5.400~5.499%区分の 68.0%であり、前年度の 69.4%に比べ 1.4 ポイント減少し、5.500~5.599%区分も前年比 0.2 ポイント減少しました。

(イ) 合乳検査乳量および成分率の月別変動

図 1 に合乳検査乳量および成分率の月別変動を示しました。

検査乳量は 5 月にピークを迎え 11 月まで減少し、以降 3 月まで増加傾向を示しました。4 月から前年度を上回る乳量で推移しており、9 月には北海道胆振東部地震による生乳廃棄の影響を受けましたが、上期の累計乳量は平成 30 年度対比 101.3%、下期累計乳量は同 100.4%、通年では同 100.9%でした。

成分率は例年と同じく 8 月に成分率の下限を迎え、12 月まで増加傾向を示しました。